苔の小瓶の神話

あるところに、小さなガラスの瓶がありました。
その中には、しっとりとした大地の茶色と、三種の緑が息づいていました。
緑はひそやかに呼吸をして、瓶の内側にやわらかな森を育んでいました。

森の下には、小さな洞穴がありました。
洞穴の奥には、「まっくろくろすけ」たちが集まって、ポロンポロンと丸い音を響かせていました。
それは暗闇の音ではなく、心をあたためる子守歌のような音色でした。

洞穴の前には、白いトトロが座っていました。
白いトトロは、朝の光をまとったように清らかで、瓶を覗き込む人をやさしく見守っていました。トトロは、くろすけたちの遊び場を守る門番であり、同時に外の世界へ旅立つ人への送り手でもありました。

瓶の上に広がる三つの苔は、それぞれ別の緑をしていました。
ひとつは深く濃く、安らぎを。
ひとつは明るく淡く、希望を。
ひとつは瑞々しく、生命の循環を。
その三つの緑が重なり合い、瓶全体を包み込むように調和していたのです。

この小さな瓶は、玄関に置かれました。
外へと歩み出る者を送り、帰ってきた者を迎える、境界の守り神となりました。
瓶を覗き込むと、誰もが緑に包まれ、土の匂いに安らぎ、ポロンポロンという音に心を癒されるのです。